

## ■大橋博司先生メモリアル特集

## 故大橋博司先生メモリアル特集にあたって

《われわれのささやかな集いが「神経心理学懇話会」として発足したのは1978年のことであった。この懇話会が学会にまで成長するのにさして時間はかからなかった。今や日本神経心理学会の会員はすでに700名を越えており、その専攻領域も、精神医学、神経内科学、脳神経外科学、耳鼻咽喉科学さらに種々の心理学、言語病理学、言語治療、リハビリテイション医学と多様化している。この時にあたって「神経心理学」誌がわれわれの学会の機関誌として創刊されるはこびになったことは誠に喜ばしい次第である》と大橋博司先生が本誌の創刊号に記されたのは1985年5月のことであった。

そしてそれからわずか一年余を経ずして1986年9月11日、先生は忽然として世を去られた。本学会の前身、神経心理学懇話会の誕生から数えても、まだ10年の年月も過ぎ去ってはいなかった。

しかしながら、その間に先生がわれわれの学会の理事長、本誌の編集委員長としてのみならず、わが国における神経心理学の発展にいかに献身的に貢献されたかについては、改めて多言を要しないであろう。今や古典に数えられている「失語・失行・失認」(1960年)を始めとする先生の長年にわたる数々の学問的業績についても、すでに「追悼」(本誌1986年2巻2号:濱中淑彦)に詳しく述べられているので改めて立ち入らないが、この度本誌編集委員会が大橋博司先生の御業績を記念する特集(本誌1987年3巻1号に告知)を企画実現したことは、本学会(懇話会)発足後10年を目前にして学会員1000名を数えるに至った今日、極めて有意義な事業だと考える。本号で大橋博司先生の比肩することなき御業績を偲ぶことは同時に、本学会10年の歩みを回顧しつつ未来へと新しい第一歩を印すことに他ならない。その意味で、今回この特集に自ら進んで寄せられ厳正な査読を経た数編の原著論文が、いずれも極めて今日的視点から現代神経心理学のトピックスを論じてることに注目したい。この特集が神経心理学と本学会の新たな発展の一契機となるであろうことを心から念願する次第である。

日本神経心理学会理事長 豊倉康夫